
義弟 I N T H E B E D

龍馬

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

義弟 IN THE BED

【Nコード】

N7563A

【作者名】

龍馬

【あらすじ】

最近の義妹ブームに乗っかり義妹が欲しかった少年、雅春について念願の義理の……義理の……弟が！？

(前書き)

いやあ〜今は義妹ブームみたいですね〜。

まあ、なんとなく対抗して書いて見ました。

さあ、存分に萌えて下さい！

ああ〜義妹が欲しい！

唐突に何を言い出すかと思うかもしれないけど、俺は今非常に義妹が欲しい。

きっとそれは昨日友人に借りたエロゲのせいだろう。

設定はありがちだった。普通の少年の家に義妹がやってきて、その後……

みたいな感じ。で、俺はそれに影響を受けて急に義妹が欲しくなつたんだ。

そして今日、事件は起きる！！

「雅春〜降りてらっしゃい」

母親の声が布団の中に埋まってくいている俺の耳に届いて来る。普段なら、雅春はうつつがっていただろう、しかし今日は違う。

何故なら、昨日やったエロゲで義妹がやってくるのが、こんな感じだったからだ。

淡い期待を込めて雅春は返事をし、パジャマのまま階段を駆け降りた。

「なんかよう！？」

母親がいるリビングの扉を勢いよく開けた。リビングには休日のため父親もテレビを見ながら寝転がっていた。

「おお、雅春！早速なんだが重要な話がある」

「なに！？父さん」

これから起こるのであるとかとを想像すると自然と心が弾み、口調がリズミカルになる。

「実はお前は……今日からお兄ちゃんになるんだ」
ギター、雅春は今どき誰も使わないような言葉を心の中で反響させた、そして体は無意識に飛び上がった。

「ああ、そんなに嬉しいの？ずっと一人っ子で寂しかったのね。でも、今日からは大丈夫よ」

母さん、そんなのは良いから早く対面させてよ！少年はジタバタと世話しなく動きジラス母親を急かす。

「まあまあ、落ち着け逃げはしないから」

「そうだ、義妹は逃げないんだ！……でも、待てない！！」
「入って来て〜」

雅春の母親が、リビングの後ろのドアに声をかけた。恐らく、ここにいたのであろう。

ドアが縦にゆっくりと開く。

待ってたよお！マイシスター〜！！！！

そして、ついに全貌が明らかに……

「て、うおおー！！お

ああ！！おおお！？」

声にならない、声にならない！

ドアから姿を現したのは、タンクトップに短パン、そしてハイソックスを履いたダサダサファッションで、身長は190cmはあり、二の腕が雅春の二倍以上ある筋肉ムキムキのマッチョマン。極めつけに顔はヤクザも真つ青な鬼の様な形相。

「SOS！SOS！！おーじんじ！おーじんじ！！」
雅春は飛びはねた、現れた男のその顔を見た瞬間、『殺し屋』だとそう直感したのだ。

「あらあらそんなに嬉しいの？」

「な、それはどういう……まさか！」

「僕、山田剛タケシ、これから、お世話、なります！」

ちよつ……助詞、助詞！助詞が抜けてるよ。

現れた男は口を開き自己紹介をした。

ま、まさか……そんなアンビリーバボオな……この日から、俺と“義弟”との共同生活が始まる。

「まあ早速なんだけど、父さんと母さんは出かけてくるから、二人で仲良くしていてくれよ」

「ええ！！」

この男と二人つきり？ヤバイ、ヤバイよ、殺されちゃうよ！

「ちよ、チヨット待つてよ。流石にいきなり二人きりてのは……」
必死に両親を止まらせようとするが、雅春の努力も虚しく両親は出かけて行ってしまった。

気まずい……ど、どうにかしなければ……

「あ、あの……よろしければ肩をお揉みしましょうか？」
あれ？コイツ義弟だよな？なんで敬語使ってるんだ？

「いえ、僕、揉みます。お兄さん、休み、下さい」

「い、いえいえ、滅相もございません!!」

やたらと切迫詰まった喋り方で雅春は剛の申し出を断った。

「僕、お兄さん、肩、揉みたい」

「あ、ありがとう。それより、とりあえず助詞を入れてみない？」

「あ、すいません……つい緊張してしまって」

それから暫くして二人は軽く自己紹介をした。

まず分かった事で重要なのは二つ、一つは剛が雅春より年下で16歳と言う事。

「ありえねえ」

頭の中で雅春は突っ込んだ。

もう一つは顔に似合わず、内気で気が弱いという事だ。

自己紹介が終わり、暫く沈黙が続く。このまま何もしないのは非常に気まずいので雅春は提案した。

「トランプでもしよう」

二人はリビングを出て階段を登り雅春の部屋へ向かった。

「さあ〜どっちだあ!」

「ムムムム……こ、これです!」

雅春の手には二枚のカードが、そして剛はもの凄い形相でそれを睨み付ける。正面から見ると怖いので雅春は目を会わせずにトランプをする。

「よっしやあ！」

「うおおお！」

剛が引いたカードには死神の様子が描いてあった。剛はそれをみて雄叫びをあげる。

そして剛は泣き出した。

ええ、婆抜きで負けたくらいでこんなに号泣！？

剛の目からは大粒の涙が滝の様に流れ出ている。

クソッ……このままじゃヤバイ、こうなったら

「剛、俺はトイレに行くよ。少し待っていてくれ」

雅春は数枚のカードをこっそりとトイレへ持ち出し、ジョーカーの小さくカードに印を付けた。

その頃部屋にいる剛は泣き止み、少しだけ雅春の部屋を見渡して見た。

「こ、これは……！」

と、直後に足音が聞こえて来たので剛は座り直す。

その後トランプは全て剛勝った。トランプが飽きて来た頃には二人とも腹が減っていた。時計を見ると既にお昼を過ぎていたため、トランプをやめ近所のコンビニへと買い出しに向かった。

「あ、家に持って帰るとゴミ捨てが大変だからここで食うか」

二人はコンビニの前で食事を取る。剛の姿があるせいかコンビニに来る客は皆顔が青ざめていた。

「ん〜家帰ってもやることないし……このままどっか行くか？」
「はい！」

剛が即答したので、二人は町へと向かった。
歩いている途中、剛が石につまずき転び食べていたアイスを落と
してしまった。すると剛が泣き出しそうになったので、すかさず雅
春は自分のアイスを剛に譲った。

二人は様々な所を歩き回った。ゲームセンターに本屋、シヨツピ
ングモールなんかも見回った。最初は怖かった、だが、剛は決し
て外見ほど恐ろしくは無く、寧ろ優しい男だった。楽しかった、雅
春は一人っ子で小さい頃からずっと一人だったから……それに……

「ようう雅春じゃねえか！」

不愉快な声が響く。数人の男子学生らしき者達だ。

「お前ら……」

「あ〜そうそう。お前教科書全部無くなったって言ったじゃん？あ
れ、ゴミ箱に全部“しまつて”あつたぜ」

それに、俺はいじめられているから

年齢の近い男子と一緒にいるのは楽しかった。

せつかく楽しい気持ちでいたのに……

「まあ、ゴミ箱に入ってたって関係ないよな」

お前ら……

「なんだつてお前自体がゴミなんだし」

なんなんだよ……

「ギャハハ、まあ弱虫、ケチ、運動音痴、卑怯、これだけ揃って
んだしな」

……

「ゴミに失礼……」

「いい加減にしろ！お前らあ……！」

怒鳴ったのは、後ろにいた剛。剛の迫力に男子生徒は口を止めた。

「お前らに何が分かる！？お兄さんはなあ、義弟の僕のためにワザとトランプに細工して負けてくれたり……」

あ、気づいてたの？

「自分のアイスをなんの躊躇も無く僕にくれたり……」

あれ、もう溶けちゃってたからさ

「良いところが沢山あるんだ！お前なんかにお兄さんを馬鹿にする資格は無い！消えろ……！」

剛のあまりの迫力にいじめっこ達はブルブルと震えだし、そして逃げさった。

なんだよ、本当に良い奴じゃん。これから、きつと仲良くやっていけるな

雅春は家に帰り心底そう思った。家に帰った時にはもう夜だったので、疲れたので二人は直ぐ寝る事にした。

雅春がベッドに潜り込むと……

「うわああああ……！」

なんと裸の剛がそこにはいた。

「お、お前、一体何を……お前の布団はこっちだぞ」
床に敷かれている布団を指指す

「いや、お兄さん。こつというの好きみたいなので……」

剛の視線の先には借りたエロゲがあった。

剛を見ると……うるうる目で上目使い、そして

「お兄……ちゃん」

そ、その顔でそのセリフは、勘弁してくれえ……

しかし強引に剛は雅春をベッドに引きずり込んだ。

「へやあああああ……!!」

雅春の悲鳴だけが最後に響いた。

(後書き)

まあ、ふと思いついたので書きました。30分くらいですかね？

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7563a/>

義弟 IN THE BED

2009年7月3日19時02分発行